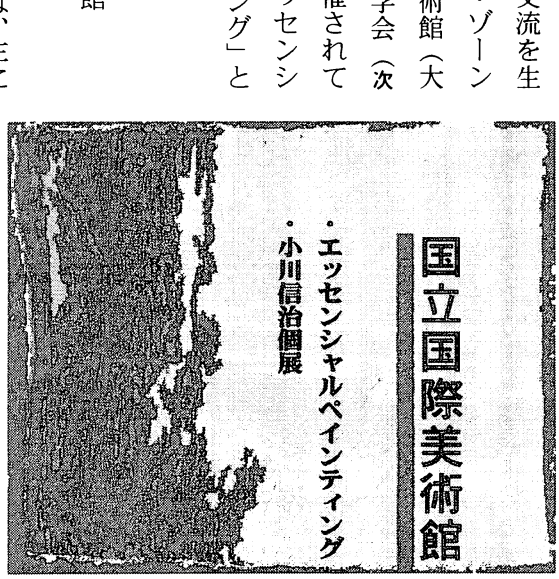
KSKQ第三種郵便物認可<サロン・あべの>通巻5350号2006年11月18日

〈サロン・あべの10月の出会い〉

平成18年10月21日(土)、〈サロン・あべの〉10月の出会いは、竹の生命力と現代美術の発展・成長をイメージしたオブジェや、人と美術との交流を生み出すパブリック・ゾーンのある国立国際美術館(大阪・中ノ島)の見学会(**次頁写真**)です。今開催されている展覧会は「エッセンシャル ペインティング」と「小川信治個展」

・国立国際美術館

国立国際美術館は、主に現代美術を中心とした作品を収集・保管・展示し、関連する調査研究および事業を行っています。建物は、1970年の日本万国博覧会開催に際して建設された万国博美術館を活用していましたが、収蔵庫が狭くなったのと施設が老朽化してきたため、大阪・中之島に、完全地下型の美術館として新築、移転することになり、2004年11月に開館しました。



新しい美術館では、現代美術を発信する美術館としてこれまでの活動を継承しながら、さらに国内外の美術の動向を幅広く紹介する活動をしています。

・エッセンシャル ペインティング

1990年代は、美術の歴史上、大きな転換期でした。例えば、戦後の美術界を支配してきたアメリカ主導の美術観が、再検討を迫られました。世界各地の都市では、美術をめぐる環境が激変しました。

美術のなかでも最も歴史があり、常に関心的であり続けてきた絵画においては、90年代、ヨーロッパとアメリカの画家たちが、斬新な絵画によって注目を浴びました。過去の絵画を消化しつつ、今日的な美と意義を持ち合わせたそれらの絵画は、各々が独自性に富んでおり、決してひとつの絵画観に基づいているわけではありません。しかしいずれも、現代の感性や価値観に根ざし、前衛に対するこだわ

りからは解放されています。またそのほとんどが、新鮮な具象的絵画である点も特徴的です。

この展覧会は、90年頃から現在までに国際的舞台で脚光を浴び、ヨーロッパとアメリカの最前線で活躍している画家たちがまとめて紹介されています。日本初紹介の画家も多く、グローバル化時代の絵画を知る格好の展覧会です。

・小川信治　個展

卓越した技術で多層的に交錯する世界を描き出す小川信治（1959～）の個展です。

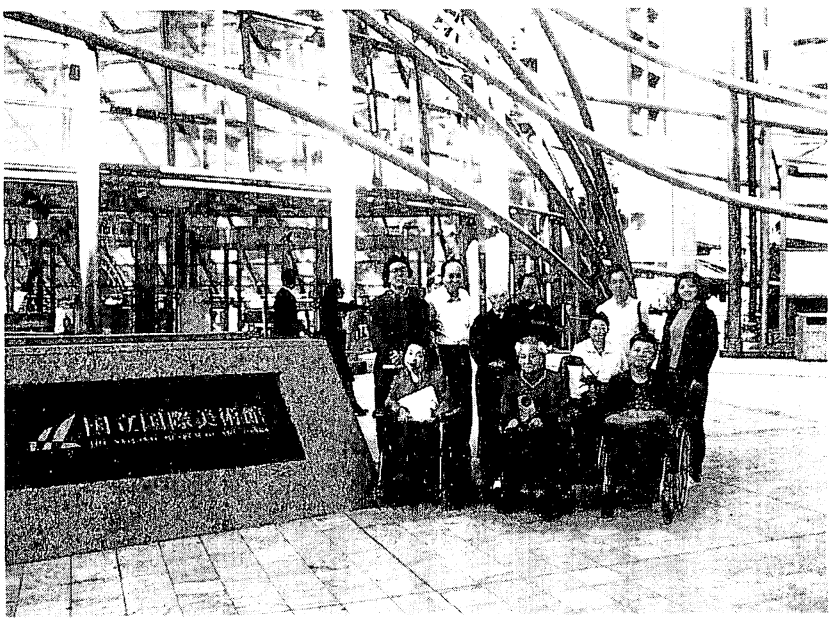
作品は、名画、絵葉書、写真、浮世絵などを元に、人物や風景を消去・追加・置換して描き直すことで、複数の世界が互いに干渉するモアレとしての「世界像」を紡ぎ出します。

一見、写真と見紛うほどの精細な作品は、私たちが普段見ているものとは別の世界の可能性を探っています。

ダ・ヴィンチやフェルメールといった西洋古典絵画からイメージの中心となる人物を抜き去って描き直した「WITHOUT YOU」シリーズ、写真や古い絵葉書を元に、人物や建物などを2つ並べて描き込む「PERFECT WORLD」シリーズ、1つの風景が層状に組み換えられて別の風景を作り上げる「干渉世界」など、油彩・鉛筆画・映像の三つのメディアで、作品は展開しています。

この個展では、「WITHOUT YOU」シリーズから新作「モアレの風景」まで、約50点の作品を通して、複数の世界が互いに干渉するモアレとしての「多世界」を観ることが出来ます。

〈サロン・あべの〉が出来て20年、いろいろな出会いがありましたが、美術館での出会いは初めて。グローバル化時代の最先端をいく絵画展を見終わって、戸惑ったり、頷いたり、の感想をお茶しながら話し、4時散会しました。



都市型の建物として地下で作品を展示する新しい美術館は、地上の部分から想像できない広さがあり、バリアフリーにも配慮されていました。芸術の秋、機会があれば一度鑑賞に行かれてはどうでしょうか。サロン・あべの10月の出会いでした。

（参加者14名　山村貴司）

33

邦子、‥ん歳の手習い。

尊厳死法案の検証

1976年に発足した日本安楽死協会の安楽死法制化の動きに対して、原田正純さんは「安楽死法制化を阻止する会」を発足しました。その後、安楽死協会は「尊厳死協会」に改名し、法制化の動きは再び活発化し、2005年6月には、13万8千人の署名を集めて尊厳死法制化を国会に請願しました。それに対して、同年6月25日に、原田さんを代表とする「安楽死・尊厳死法制化を阻止する会」が改めて立ち上げられました。その会は、「命ある限り精一杯生き抜くことが人間の本質である」という立場から「家族の負担を考える必要のない社会、緩和ケアの医療の確立を求めるべきである」という主旨から設立されたのでした。

原田さんは、世の中に生きるべき命と生きる価値のない命の区別はあるはずないと考え、それを胎児性水俣病の最重症のとも子さんの例で示しています。とも子さんは22年の生涯を母の腕の中で、一言も話すこともなく生きました。母親は「私はこの子をずっと抱きっぱなしで、他の子供の面倒をみてやれませんでした。ところがとも子をみて育った子どもたちは自分のことは自分でする、お互いに助け合う、気持ちの優しい子に育ってくれました。また、この子の写真やテレビの映像を見て、環境に注意するような社会になれば、この子は、宝子ですよ」と語りました。つまり「とも子さんの存在は社会に大きなインパクトを与え、その命の価値は計り知れないものがある」ということを教えてくれたのです。

今回の尊厳死法制化の動きの背景には、「遅々として進まぬ臓器移植の問題があり、臓器移植推進者から法制化の要求が強い」ということがあります。9月に行われた「死の法」研究集会には、原田さんはお体の調子が悪く出席されませんでしたが、当日配布の資料集には尊厳死法案の問題点として、次の3点をあげています。第1には、あのような病院の死を迎えたくないという病院の死が苦痛であるのに、なぜそのような病院の死(医療)になっていったかという議論なしに、生命維持装置を外すか、外さないかの議論にすり替えることは危険である。第2には、尊厳死法制化に賛成の人の80%が65歳以上といわれているが、彼らの死にたいという理由には、「苦痛に耐えられない」という疾病による要因と「家族への迷惑」や「経済的限界」などの社会的な要因があり、安易に自己決定権の尊重だけの問題に転嫁することはできない。第3には、最近の高齢化、高度医療に伴う医療費増加の抑制策の中で、尊厳死や自然死の名のもとで医療費を削減しようという意図が見え隠れしているが、声も出せない病者の声なき声に耳を傾けるべきであるということです。

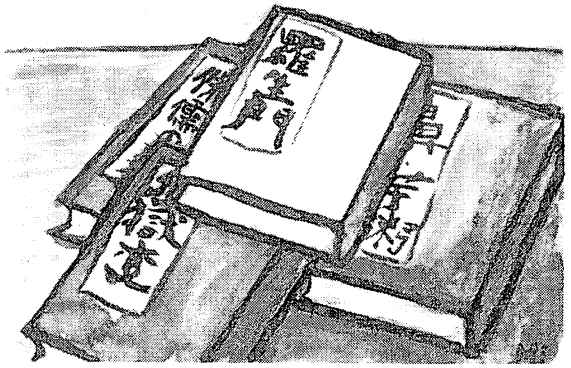
また、原田さんは「自由な意思による死の選択があって良いが、それを法制化することによって、むしろ死を画一化し、意思表示できない弱者(重症者や幼児など)を合法的に切り捨て、死を強制される怖さがある。法制化しなくてもリビング・ウィルは尊重できるという意味においても尊厳死法制化には反対である」と書いています。

集会には、バクバクの会(=人工呼吸器をつけた親の会)やALS(=筋萎縮性側索硬化症)の人工呼吸器使用者や家族が多数参加し、尊厳死法案反対の意見が述べられ、危機感の大きさを物語っていました。尊厳死法制化については、弱者の声を聞く慎重な議論が必要であるといえます。(原田正純「尊厳死法制化に反対する」『第2回「死の法」研究集会資料集』を参照)

(定藤邦子)

若いころの仕事

芥川龍之介の全集を、時間を見つけては読んでいる。その何巻目かを読んでいたとき、ふと「どういう順番でこの小説は並べられているのだろう」と思った。というのは、読んでいるだけで色あざやかな服を着た、動きのある人物がまるで映画のシーンのように次々と目に浮かぶ素晴らしい小説が続いていたのに、あるところでいつのまにやら退屈で、中途半端な作品がポツリポツリと現れ始めることに気がついたのである。



芥川ほどの文豪をまったく文学に素人の私が評するのは愚行のかぎりであるが、「最初は才能で書き、最後には私小説的な自己表現に達する前で亡くなったという評価」(＊)があったことを後で知って、私の感じたことはそう大きく間違っていたわけでもなかったのだろうと思った。

なかには原稿が書けなくて、泣き言の代わりに書いているようなものもあったのは、芥川龍之介を天才と信じていた私には衝撃的でさえあった。「あの芥川がこんな文を書いていたのか！」という驚きである。

しかし、逆に言えば、歴史に残るこの文豪でさえ、あのような平凡な文章を残しているのだと思えば、凡人の私には慰めになるのかもしれないし、天上の人だった作家が少しは身近に感じられるようになるというものだ。

ただ、気がかりなのは、若いときの作品のほうが輝いていると言われたときの作家の苦悩はどれほどだっただろうかということである。私は芥川の評伝をまだ読んではいないので作家の気持ちがどんなものだったのか、まったく知らない。しかし、満足できる作品を書けなくなった作家をモデルとして書いていると思われる作品もいくつかあり、少なくとも一時期は自分の文筆の衰えを感じていたところがあったように思う。

人は年を取れば賢くなり、考えも深くなるという前提が、私たちの社会には昔からある。少なくともそうだからこそ年功序列という制度が残っている。それ以上、年を取っても有能にならないと思われたときに定年を迎えるようになっているのだろう。

だからこそ、定年になるずっと前に、もう若いころに成し遂げたものを超えられなくなった場合は、それは苦しいに違いない。自分の怠惰を責めることもあるだろう。健康や家族の状況を弁解に用いているうちに、周り

の人々だけではなく自分自身も騙（だま）しているような気持ちになるかもしれない。

考えてみれば、このようなことは若くして天才と言われた人だけではなく、私のような平凡な人間にも言えることだと思う。一晩眠れば元気になる体力と、周囲のことを考えずに集中できる無鉄砲さと、経験不足からくる根拠の無い自信から、運さえ良ければ年齢を重ねた者には届かない高みに立つことができたかもしれないのだ。

とすれば、その時期を過ぎた者はどうすればいいのか。自ら死を選んだ芥川はその答えを出してくれなかったが、その現実を受け入れる他ないのだろうと思う。すべての人は死を受け入れなければいけないが、その前に老いを受け入れなければいけない。しかし、さらに、その前には溌剌（はつらつ）とした若さをすでに失っていることを受け入れなければならないのである。（知）

（＊）饗庭孝男「芥川龍之介：その批評と表現」『芥川龍之介全集㈬』ちくま文庫、一九八七年より（ただし、饗庭自身はこの評価を否定している）

声で読書のお手伝い

音訳テープのご案内

音訳グループ「糸でんわ」のご協力で〈サロン・あべの〉紙第244号の音訳テープが出来ました。

■音訳テープ文庫

(a) 〈サロン・あべの〉紙は、第１号より第244号までそろっています。
(b) 〈サロン・あべの〉十周年記念誌「はあとが、はろー！」
(c) 絵本「未知の記憶」（作・絵 中川勝彦）
(d) 「ラジオたんぱ」放送「〈サロン・あべの〉平成7年5月の出会い」放送分（３０分）
(e) エッセー集「逃げた『ヨナ』～ボランティア活動の周辺～」（岡本栄一著＝糸でんわ音訳）
(f) 「キミたちだけじゃ困るんだ～身障者だけで旅した十余年～」（山田誠１９９５・２・２２著 ＝糸でんわ音訳）
(g) 「金子みすずへの旅」（島田陽子著＝糸でんわ音訳DJ）
(h) 「夕やけ空のオニヤンマ」（牧口一二著＝糸でんわ音訳）
(i) 「ガベちゃん先生の自立宣言」（曽我部教子著＝糸でんわ音訳）
(j) 「セルフヘルプグループ」（岡知史著＝糸でんわ音訳DJ）
(k) 「名物　天王寺かぶら」（猿田博創作　難波利三監修＝大阪市立天王寺図書館制作）
(l) 「知らされない愛について」（岡知史著＝ぽけっと音訳）
(m) 「愛　ひとり旅」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(n) 「奥田真祐美のシャンソン手帳」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳DJ）
(o) 「もうちょっと知っとく？　私たちの阿倍野」（難波りんご著＝糸でんわ音訳DJ）
(p) 「猫とシャンソン」（奥田真祐美著＝糸でんわ音訳）
(q) 「ほんの少しの神に近い部分」（岡知史著＝糸でんわ音訳）
(r) 「勁くしずかに」（河野勝行 編・著＝糸でんわ音訳）
(s) 「たまごが　ポン！」（稲垣恵雄著＝糸でんわ音訳DJ）
(t) 阿倍野名所旧跡いろはがるた（猿田博＝糸でんわ音訳）
(u) 交わりのなかで　～ホームヘルパー残像～（加藤みどりさんを偲ぶ文章を作る会著＝糸でんわ音訳）
(v) 冨田慶子出演の「ちょっといい話」（朝日放送05.6.26と05.9.18）の録音テープ

ご希望の方には、ダビング、または貸し出しをしますので、冨田（☎０６・６６９１・１０２８）まで。音訳の後のDJ印はディジー録音。

Mai スウェーデン留学記 2

ウプサラ

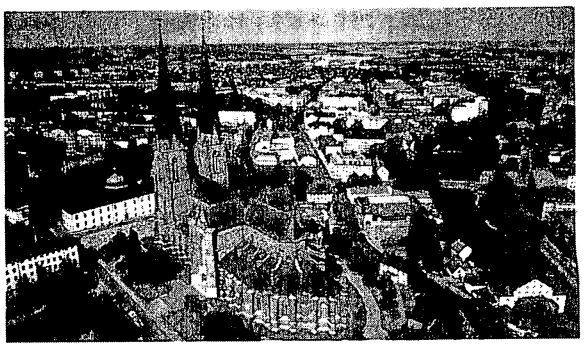
「スウェーデンで一番好きな街はどこ?」と聞かれたら、私は迷わずこう答えると思います。「ウプサラ」と。

ウプサラは、首都ストックホルムから北へ電車で約40分の距離にあるスウェーデンでも古い街、大学都市です。そんなに大きな都市ではありませんが、北欧最大の大聖堂を中心に発展してきた街でもあり、植物学の父と言われるリンネや世界で活躍してきた有名人を多く輩出してきたところです

私は、ヴェクショー大学に1年間、留学していたのですが、ちょうどヴェクショー大学での生活が始まる前、6月から2か月間、スウェーデン語を勉強するため、ウプサラでスウェーデン語のサマーコースに参加していました。スウェーデンで最初に辿り着いた場所です。

もともと方向音痴な私ですが、このウプサラの街で、随分道に迷うことになりました。学校に辿り着けたのはいいけれど、徒歩30分かかる学生寮に戻れなくなり、倍以上かかって、人に聞きまくってようやく寮に帰ったり・・そういうことを1日に3回もくり返し、クタクタに疲れ果てたのも、今では良い思い出となりました。スウェーデンで迷うと人に道を聞こうにも、人がいない、お店は、夜の7時には閉まってしまう・・白夜で夜の11時頃まで明るいとはいえ、とても心細いものです。つたないスウェーデン語で、ようやく会ったお年寄りに、「ここに行きたいのですけど・・」と尋ねるのもだんだん情けなくなります。まったく正反対の方向に歩いていて、自分が信じられなくなったりしたものです。実は、そんなに複雑な道ではなく、迷ったのは私だけですが。でもスウェーデンに来て、スウェーデン語が一番役に立ったと思ったときでした。お年寄りには、スウェーデン語の方が答えやすいからです。

ここでのサマーコースでは、スウェーデン語を学ぶために、様々な国からたくさん参加しています。アメリカ、ドイツ、オランダ、スイス、日本、韓国、イギリス、フランス、ロシア、スペイン、ポルトガル、イタリア、ギリシア、フィンランド・・・多国籍、年齢も10代から70代という様々。ここでは、スウェーデン語の文法、会話の授業だけでなく、スウェーデンの政治、文学、映画、音楽、芸術、文化、社会など様々な視点からスウェーデンとはどういう国かを学び、1日中スウェーデン語漬け(?)となります。また、様々な国からの参加者とたくさん知り合えるので、彼らからそれぞ



ウプサラの街並み=ポストカードから

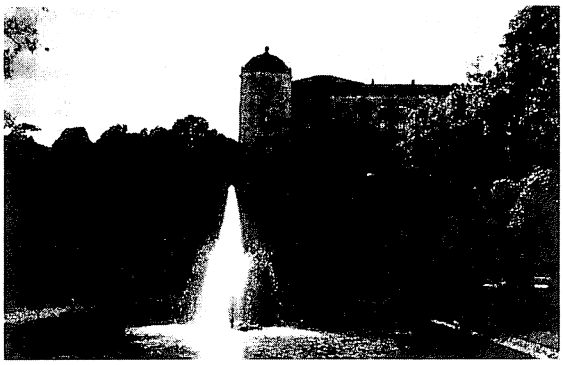
れの国について多くのことを学ぶことができました。お互いの国の言葉を教えあったり、「日本の食べ物を食べたい」という彼らを、ウプサラにある寿司レストランに連れていったり、学生パブに行き夜中まで語り合ったり、寮の前の芝生でずっとなんでもない会話を楽しんだり、スウェーデン語の授業以外の国際交流の思い出は、たくさんありすぎて書ききれないくらいです。

お父さんがスウェーデン人、お母さんがアメリカ人、お父さんがスウェーデン人、お母さんがポルトガル人というようにハーフの子ども達が親のルーツを探り、文化を学ぶために参加しています。そんな彼らの中で、「ハーフだから変な顔になっちゃったんだよ」「外見が違うから、いじめられる」「自分の国が大嫌い」とハーフであるために、自分の住んでいる国では目立つ外見に悩んでいる友人達。純日本人である私から見れば、羨ましいくらいのピンク色の肌の白さもハーフの人達が持つ「良いとこどり」な顔立ちも「嫌」と言うくらい・・・。「人と違う」から「嫌がられる」というのです。

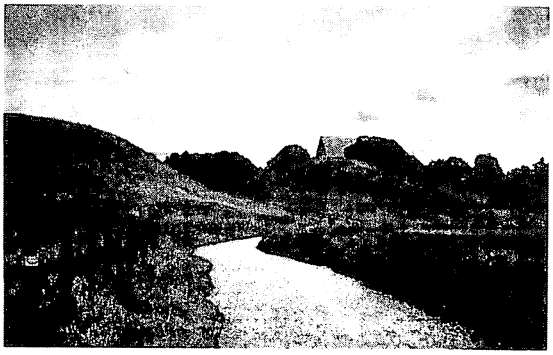
私は、ハーフである彼らがどういうことを彼らの国でされてきたのか、わかりません。彼らは多くは語りません。でも、彼らの素直さと優しさに、何度も救われた私です。（一緒に帰ってもらいましたので、道もしっかり覚え、1人でも迷わなくなったのも彼らのお陰です）

地球人なのに、「ちょっと違う」だけで悲しみを持つ彼ら。けれども、彼らがくれた優しさがあったからこそ、その後の留学生活も乗り切れたと思っています。今でも私の最高の友人達・・・ウプサラで出会って、ウプサラで別れ、そしてまたどこかで会えると信じています。

（清原　舞）



ウプサラ城（現在は知事の邸宅）
＝2005年6月20日　筆者撮影



古代の王の墓－ガムラ・ウプサラにて
＝2005年6月25日　筆者撮影

お知らせ

〈サロン・あべの〉12月の出会い

内　容…お昼しながら話しましょ、
　　うれしいこと　たのしいこと。
日　時…12月2日（土）午後1時～
場　所…天王寺アポロビル9階　楓林閣
会　費…2500円
申し込み締め切り…11月27日（月）
申し込み・問い合わせ先…
TEL06-6691-9071（山村）

美智子のこんな話

岸田美智子

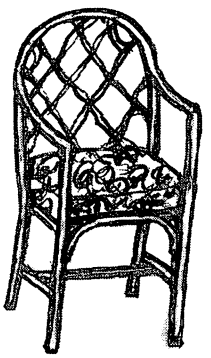
住吉区アクションプランの動きについて

前回もこのコーナーで書かせていただきましたが、住吉区のアクションプランのひとつである高齢・障害者部会の推進委員に私も入れていただいています。その中で私が提案した「トイレ貸します　一声運動」のことが、いろいろこの部会で議論されたり、もう既に、実際に推進委員の方々が地域のお店や医療関係の方に話していただいているようです。その中で新たな課題が出されてきています。例えば、あるお店では車いすの障害者の方に、困ったときにはトイレをお貸ししてもよいが、その時、ヘルパーさんがいるのかいないのか、いないときには必要ならば手伝うことが出来るが、もし事故が起こった場合は誰の責任になるのかという問題が出てくるのではないか。あるいはまた、車いす対応のトイレはあるが患者さんの待合室の奥にあるので、混んでいる場合、待っている患者さんに迷惑がかかるので、難しいのではないか。という問題も出されてきました。このような課題は今後ももっともっと出てくると思われるので、この運動をいかに広げていくかが難しいと再認識しているところです。

そして、外出とトイレに関するアンケートも11月から実施され、今回、対象は身体障害者で、障害者手帳1・2級の重度の方を100名に実施していくことになりました。今回の場合、アンケート形式は知的障害者や精神障害者の方にはむかないし、外出したときに困ることは具体的な設備面や街づくりに関することではなく、人間関係づくりや、どういう風に声をかけるかというソフト面の問題がほとんどなので、また別の形で実態調査をしようということになっています。そして、この「トイレ貸します　一声運動」と合わせて虚弱高齢者「安心拠点マップ」づくりの実態調査も市立大学と共同で進めていくことになっています。

この障害者に「トイレ貸します　一声運動」は旭区などではもう既に実施されていて、車いすで使えそうなトイレに貼っていくシールを作られ、町のあちこちに貼られているそうです。私どもの11月の高齢・障害者部会で、旭区でこの運動を推進してこられたリーダー（障害児のお母さん）のお話を聞くことになっています。

これからも住吉区のアクションプランの動きについて報告していきたいと思っています。



SALOON 隣組ニュース

12月はどこのサロンの、どのテーマがお気に入りですか。いい出会いしませんか。

■「サロン淀川」12月の出会い
日　　時：12月17日（日）午後1時30分～4時
内　　容：年忘れ、すべて忘れて、出直そう
「サロン淀川」恒例のお祭り。マジックショー、ビンゴゲーム、いろいろな催しを楽しみませんか。
会　　費：なし
場　　所：淀川区民センター「やすらぎ」
大阪市淀川区三国本町２－１４－３
問い合せ先：淀川区社協（ボランティア・ビューロー）☎０６－６３９４－２９００
E-mail：sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にしよど」12月の出会い
日　　時：12月16日（土）
内　　容：未定
場　　所：西淀川区民ホール
問い合わせ先：西淀川区在宅サービスセンター
☎０６－６４９４－０６３５
中本☎０９０－９８６４－９６７８

■サロン「アイ」12月の出会い
日　　時：12月9日（土）午後1時30分～4時
内　　容：クリスマス会（ビンゴゲームなど）
会　　費：なし
場　　所：「おかちやま」２階ボランティアルーム
大阪市生野区勝山北３－１３－２０
問い合せ先：生野区社協（ボランティア・ビューロー）☎０６－６７１２－３１０１
○お知らせ：サロン「アイ」だよりの音訳テープが出来ます。ご希望の方は、西浦まで。
☎０６－６７５７－８５７４

■「サロン・にし」12月の出会い
日　　時：12月9日（土）午後2時～4時
内　　容：折り紙でサンタクロースを作ろう
場　　所：西区在宅サービスセンター第1会議室
大阪市西区新町４－５－１４
☎０６－６５３９－８０７５
会　　費：なし
問い合せ先：関口　☎０９０－４２８１－５６４１

■《てくてく・すみよし》12月の出会い
日　　時：12月10日（日）午後1時～3時
内　　容：木芝居と腹話術
場　　所：あびさんサロン
会　　費：３００円
申し込み・問い合せ先：
山本篤江☎０６－６６９２－８４１１
携帯０９０－５１６８－５９７７

■「サロン・つるみ」12月の出会い
日　　時：12月10日（日）午後1時30分～4時
内　　容：今年最後のサロンは
クリスマス・パーティー
－簡単ケーキをみんなで作っていっしょに味わいましょう－
会　　費：なし
場　　所：鶴見区民センター３階
大阪市鶴見区横堤５－３－１５
問い合せ先：鶴見区社協（ボランティア・ビューロ）
奥井☎０６－６９１３－７０７０
○ケーキのトッピング材料や、みんなで食べるお菓子やクッキーなど持ち込み大歓迎です。腕に自身のある方の手作りお菓子などサイコー！　もちろん市販のお菓子もサイコー！　手品や一芸披露もサイコー！　みんなで1年の締めくくりの楽しい時間を過ごしましょう！
○12月のサロンは第2週目の日曜日になりますのでご注意ください。

■「サロン北」12月の出会い
日　　時：12月9日（土）午後2時～4時30分
内　　容：視覚障害者および重複障害者の心理
・ヘルマンハープのミニコンサート
パネラー：曽根利弘（視覚障害）氏
谷口政美（重複障害）氏
＝サロン北スタッフ
参 加 費：無料
場　　所：障害者福祉作業センター「たけのこ」
大阪市北区本庄東２－６－１１宝来堂ビル１階
問い合せ先：障害者福祉作業センター
「たけのこ」内☎06－6372－8074

■「サロンいたみ」12月の出会いはお休みです。

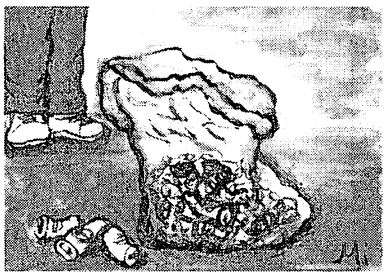
晴れのち晴れ 98

奇特な人

稲垣恵雄

私と妻は毎週金曜日、近くの作業所へ通っている。２人の職員と８人の通所者の小さな作業所だが、いつも和気藹々とした雰囲気の中でみんなは作業に励んでいる。

作業所にはいろいろな作業があるが、主に牛乳パックを手漉きしてレターセットやはがきを作ってバザーなどで販売している。そして月に１度の食事会や行楽地に出かけたりして親睦を深めている。



実は数年前から空き缶を集めて、それをつぶす作業もしている。最初の頃はなかなか空き缶が集まらなかったが、徐々に口コミで広がり最近では毎日のように知人や近所の人が空き缶を持って来てくれるようになった。そんな中で半年ぐらい前から度々空き缶を持参してくれる人がおるのだが、その時、必ず百枚ほどの１円玉をビニール袋に入れて空き缶に添えてあるのだ。

その人はいつも空き缶を作業所の前に黙って置いていくので誰も気がつかなかった。でも先日、職員が空き缶とビニール袋に入った１円玉を置いて行く人を見かけたので、お礼とお名前を聞こうと思ったそうだ。ところがその人は何も言わずに笑顔を残して自転車で立ち去ったという。空き缶だけでも有難いのにお金まで添えて持って来てくれるなんて何と奇特な人なんだろう。この話を耳にして私も妻も思わず感涙してしまった。そしてその後妻は「私もこれからお金をためて作業所に持って行くわ」とつぶやいていた。

寄りみち

エッセンシャル・ペインティングで観た、エリザベス・ペイトンは、現代を代表するアメリカの画家の１人。1993年、ナポレオンやマリー・アントワネットなどの歴史的人物を描いたシリーズで一躍有名になった彼女は、有名ミュージシャンや映画スターなど世界の著名人を独自のタッチで描いてきました。彼女の作品がただの肖像画とは一線を画し、独立した美しさや芸術性を保てる理由は、新しい具象に特徴的なにじんだようなタッチもさることながら、モデルの一瞬を捉えるその感覚、瞬間の表情へのこだわりにあるのでは。（石）

＜サロン・あべの＞VOL. ２４５　発行：平成１８（２００６）年11月１８日　定価￥１００
編集人：＜サロン・あべの＞運営委員会　表題：中西利香・筆　文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６ 冨田慶子方＜サロン・あべの＞
TEL・FAX 06-6691-1028　郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印　刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターＤビル２Ｆ TEL06-6719-8212
本紙はホームページでもお読みいただけます。書庫は、http: //pweb.sophia.ac.jp/~t-oka/salon/

発行人：関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜2-10-13 緑橋グリーンハイツ１Ｆ］

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）